

「ねこさん」と多くの成心日生

森 一久

凡そ人というものは多くの場合、己が生きざまや人生観について、はっきりした自己表現や自覚を示さないで生きている。だから、「人の評価は、柩を覆って定まる」と言われる所以でもあろう。しかしなお、ユニークな生き方を貫き、或いは「無冠の太夫」を誇りとして生きた人の中には、お別れして何年も経ってなお、もう一度その「生きざま」を模索したいとの念を、残された人々にかき立てる方がいる。兼子忠義さんが正にそのような人であり、この本が発起された契機でもあろう。

「ねこさん」との出会い

兼子さんが、創立間もない（社）日本原子力産業会議（原産）に、一足早く入社していた竹内幸一さんの紹介で来られたのは、昭和三十四年、皇太子（現天皇）ご成婚の年。当時原子力開発は国民の熱い支持のもと、原子力関係の予算・法律・立地はすべて、国会の全政党と全マスコミの支持により推進されていた。この年、東京・晴海の米国原子力委員会主催の原子力展覧会は長蛇の列、昭和天皇・皇后陛下が行幸、実地運転中の原子炉を、のぞきこんでご覧になるといったブームの真ん中にあった。

その三年前発足した原産は、民間の総力を結集すべく、それまでの経団連や電力界などの活動を一本化した総合団体であり、従ってその事務局には、プロパーの職員に加え、日本銀行・開発銀行・長期信用銀行・東京電力等から、生きのいい人士が出向してきていた。

そのころの原産の活動は専ら、先進国の米国・英国からの情報の翻訳・紹介、これらの国への調査団の派遣や専門家を招いての講演会や展覧会の開催などに明け暮れていた。だが、原産でもぼつぼつ独自の調査や情報の分析に取り組むべきだと、これら若手の職員が鳩首協議、その手はじめに、我先にと原子力に乗り出していた産業界の実態は一体どうなっているのか、それを調べてみようという「原子力産業実態調査」が始まった。（毎年一回、今年で第四十回になる）

その調査結果は、兼子さんの提案で「赤字白書」のタイトルで発表、これが新聞の一面トップを飾った。原子力はなんでもバラ色の当時、一般の意表をついた題名の、この調査の発表は、「原産」が単なる保守的な団体でない、新鮮なものとして、マスコミの琴線にアピールしたものであろう。

宇宙遊泳始まる

原産での在籍は長くはなかったが、草創期での兼子さんの活躍はこのように極めてユニ-

クなものだった。原産を辞してからの兼子さんは、何物かを求めて、実に多様なチャレンジを続けていった。ある時は、大きな会社の頂上にまで登りかけたと思うと何故かサッサと見切りをつけたり、そうかと思うとブーム直前の時期に不動産業を興してみたり、はたまた（体力の限界を感じてか）調査会社をてがけたり、等々……、変転極まりない人生を旅した。

その節々にはよく私の事務所に寄ってくれて、相談にのったり乗られたりしたものだが、運転手付きの社用車で現れたかと思うと、数カ月もたたない内に、別の名刺を持って「あの会社はつぶしたよ。時に今度の仕事で……」と来訪、といったことも一度ならずだった。その度に私は「禍福はあざなえる縄の如し」という格言を脳裏に浮かべながら、彼の追い求める「福」とは一体何だろうか、こんな事なら、何も原産を辞めることはなかったのに、と思ったものである。しかし彼の望むものはおそらく、好奇心や金銭的利益を超えたところにある事を実感したものだだった。

真面目人間に取り囲まれた「恒星」

これだけ色んな分野に活躍されたのは、若いときからの広い人脈に支え、支えられての事であるが、何度かの難局の收拾策はこれまた「ねこさん」独特のやり方で、結果として相互に迷惑を掛け合った場合も少なくないが、不思議とそれが友人関係の凝り（シコリ）として後に残らない。そのわけは勿論、ねこさんの人徳のなせる業であうるが、それよりもその当事者が、彼の「理想」に魅せられたり、幻惑されていた故であらうか。

そういうお付き合いの中で、ねこさんから紹介されて昵懇な付き合いを続けている人は多いが、そこに不思議な共通点がある。それは紹介者とは一味違った「真面目人間」であられる方ばかりと言うことである。例示にする事はあとで勘弁してもらおうとして、先ず菅沼さん。日本学術会議会長を終わってすぐ、公明党の参議院比例区代表に担がれた伏見康治先生に「秘書に誰か」と頼まれ、ねこさんの紹介で始めて会った菅沼さん。「ところで、何か条件は？」との私の問いに答えて曰く「この髭を」と自分の見事な顎髭を指さしつつ「剃らないでいいなら、喜んで」と。私はかくて無条件で、伏見先生にご紹介した次第。

原産で十年働かれた川上幸一さんもその一人。最初は膨大な特許公報の中から（主に海外からの）原子力特許を抽出・要約するなど、兼子さんらと始めた原産の「調査」路線を充実・発展するなどに尽力された。いま神奈川大学名誉教授の同氏は「あかつきコロニー」なる社会福祉法人の理事長（兼・すべて）として若い身障者の教育・社会復帰・工場経営等々に献身しておられるし、また最近「心の人類学」という本で人類の「心のル

「ツ」にも迫っておられる。

この本は言ってみれば、いまや不動の「恒星」と化した兼子さんをめぐる「惑星」達が、
思い思いに綴った、その探査の記録だ。果して、この「恒星」の正体にどこまで迫りえた
か、出来上がりが、楽しみである。

(おわり)